

第43回 全日本仏教徒会議 愛媛大会「大会紀要」



愛媛県イメージアップキャラクター
みきやん
承諾番号
2705038

浄心の道 ― 巡礼 ―



第 43 回全日本仏教徒会議 愛媛大会

平成 27 年 10 月 30 日(金)・31 日(土)

ひめぎんホール

主催／公益財団法人全日本仏教会

愛媛県仏教会

浄心の道 ―巡礼―

青い海にかこまれた四国には、自然に育まれた聖地があります。古来より、修験道の地として、多くの僧侶らが修行を重ねながら、己の心と向き合ってきました。そして、これらの神社仏閣は、いま人々の心のよりどころとなっています。

「巡礼」といえば、さまざまな思いが重ねられることでしょう。巡礼する動機や目的は人それぞれですが、道を歩き、人と出会い、そして祈るのです。この「巡礼」を通じて、人は変化していく自分を発見するのです。やがて「生かされている」という感謝が生まれ、その内省への深まりは、自己への肯定感や治癒力を向上させるでしょう。これらの変化は、巡礼する人々だけに起こるものではなく、地域社会にも爽やかな空気が送り込まれ、お接待をする人々の「おもてなし」の心を育んできたのです。

これらをつなぐものは「出会い」です。自然との出会い、文化遺産などの聖地との出会い、人との出会い、そして、もう一人の自分との出会いです。その出会いの背景には一人一人の人生があります。その人生に向き合いながら巡礼していくなかで、神と仏の聖なる眼差しが注がれていることを、感じとっていただきたいのです。

四国遍路の大衆化は、江戸時代にはじまり、そして戦後の混乱期に再興^{あらわ}いたしました。これは、人間社会の平和に、宗教がいかに大切であることを顕しています。

大会テーマである「浄心の道―巡礼―」を通じて、巡礼の意義と、人々におこる気づきについてみなさまと共有しながら、世界の平和につながる機会となることを、心より祈念申し上げます。



大会日程

第1日目 10月30日(金)

●● ひめぎんホール／サブホール

12:00	開場
13:00	開会の辞／怒和 智幸（愛媛県仏教会事務局長）
13:02	洒水加持／加藤 精一 猯下（公益財団法人全日本仏教会会長）
13:07	法要 三帰依文／怒和 智幸（愛媛県仏教会事務局長） 「般若心経」（太鼓付／真言宗豊山派青年会）
13:14	大会挨拶／齋藤 明聖（公益財団法人全日本仏教会理事長） 福村 俊弘（愛媛県仏教会会長）
13:24	祝辞／上甲 俊史（愛媛県副知事） 登壇者紹介、日程説明
13:44	閉式の辞／白川 密成
14:00	基調講演／加藤 精一 猯下（公益財団法人全日本仏教会会長）
14:50	休憩
15:10	巡礼サミット パネリスト／四元 奈生美（プロ卓球選手） ホビノ・サンミゲル（聖カタリナ大学学長） 吉川 俊宏（四国八十八ヶ所霊場会会長） コーディネーター／寺内 浩（愛媛大学教授）
16:40	終了

●● 全日本仏教会代議員会議(併催)／3階 第8会議室

15:20	加盟団体の代表者による全日本仏教会代議員会議
-------	------------------------

●● 交流懇親会／松山全日空ホテル

18:30	開会の辞／斎藤 友巖（愛媛県仏教会顧問）
18:31	挨拶／石田 智圓（公益財団法人全日本仏教会副会長）
18:36	挨拶／四元 奈生美
18:41	乾杯／岡田 敬学（愛媛県仏教会副会長）
18:46	会食
18:50	伊予漫才／つくしの会
20:00	余興／大下 香奈『ナユタの花』
20:30	閉会の辞／丹下 甫澄（愛媛県仏教会監事）

第2日目 10月31日(土)

ひめぎんホール／メインホール

9:00	開場
9:45	座談会／天童 荒太「悼む人」より－巡礼－ 白川 密成、大下 香奈
10:30	休憩
10:45	記念講演／片岡 鶴太郎「流れのままだに」
11:45	終了
11:50	記念式典（閉会式） 開式の辞／薄墨 賢祥（愛媛大会実行委員会財務長）
11:52	挨拶／常磐井 慈祥（公益財団法人全日本仏教会副会長）
11:57	大会挨拶／愛媛大会実行委員長 内藤 卓洲（愛媛県仏教会副会長）
12:02	大会宣言／福村 俊弘（愛媛県仏教会会長）
12:07	次回開催地に大会旗受け渡し
12:15	閉会の辞／石丸 光明（愛媛大会実行委員会勧募長）
終了後	天童荒太サイン会 12:30～14:00



基調講演



公益財団法人全日本仏教会会長

かとう せいいち
加藤 精一 猥下

生年月日：昭和11年6月27日

現 職：真言宗豊山派第32世管長

総本山長谷寺第86世化主

経 歴：平成7年 密教学芸賞

平成12年 真言宗豊山派総合研究院院長

平成17年 大正大学名誉教授

平成23年 密教教化賞

巡礼サミット



パネリスト
プロ卓球選手

よつもと なおみ
四元 奈生美 氏

4歳から卓球を始め、大学卒業と同時にプロに転向。

結婚・出産後、2013年に現役復帰。

卓球を華やかなイメージにし、メジャーな競技にしたいという思いから、ウェアデザインを始める。

NHK「街道てくてく旅」で、四国八十八ヶ所1,200^{キロ}の歩き遍路を経験。



パネリスト
聖カタリナ大学学長

ホビノ・サンミゲル 氏

ドミニコ会聖トマス総合大学大学院（哲学、神学）修士

上智大学大学院（文学）修士

1981年 愛光学園理事長

2001年 聖カタリナ大学・短期大学部学長

【著書】『オルテガ・イ・ガセットにおける人生論』創風社



パネリスト
四国八十八ヶ所霊場会会長

よしかわ しゅんこう
吉川 俊宏 師

昭和19年1月2日 松山市生まれ

昭和42年 薬師寺住職

昭和55年 福泉寺住職

平成4年 太山寺住職

平成11年 真言宗智山派愛媛布教師会会長

平成13年 愛媛県仏教会会長

平成24年 四国八十八ヶ所霊場会会長



コーディネーター
愛媛大学教授、四国遍路・世界の巡礼研究センター長

てらうち ひろし
寺内 浩 氏

京都大学文学部卒業、2002年に愛媛大学法文学部教授。

2015年より法文学部附属、四国遍路・世界の巡礼研究センター長。

専門は、日本古代史、伊予地域史、四国遍路史。

著書は、『受領制の研究』（単著）、『愛媛県の歴史』（共著）、『愛媛の不思議事典』（共編著）など。

●● 座談会／記念講演



直木賞受賞作家
てんどう あらた
天童 荒太氏

愛媛県出身。

『家族狩り』で山本周五郎賞を受賞し、2014年にTBS系でドラマ化。ベストセラー『永遠の仔』はよみうりテレビにて連続ドラマ化。

2009年には『悼む人』で第140回直木賞を受賞。

悼む人は2012年に舞台化、2015年には映画化され全国にて上映。



俳優・画家
かたおか つるたろう
片岡 鶴太郎氏

幅広いキャラクターを演じる役者として、ドラマ・映画・演劇など様々なメディアで大活躍中。

映画『異人たちとの夏』では第12回アカデミー賞最優秀助演男優賞を受賞。

1995年に「とんぼのように」の初個展を開催。2015年には書の芥川賞と言われる第十回手島右卿賞を受賞。

●● 総合司会



しらかわ みつせい
白川 密成氏

愛媛県出身。四国八十八ヶ所霊場、第五十七番札所栄福寺住職。糸井重里主宰『ほぼ日刊イトイ新聞』にエッセイを連載、その後『ボクは坊さん。』（ミシマ社）を出版。他の著作に『空海さんに聞いてみよう。』、対談本『宮崎哲弥 仏教教理問答』。2015年『ボクは坊さん。』が映画化（10月24日全国ロードショー）。最新刊に『坊さん、父になる。』



おおした かな
大下 香奈氏

愛媛県今治市出身。NHK松山放送局の契約キャスターからテレビ愛媛アナウンサーに。

テレビ愛媛時代に、作曲家・三木たかし氏のプロデュースで歌手デビュー。

現在は歌手として全国的に活動をする傍ら、フリーでリポーターや司会業などを務める。

あいテレビなど全国6局で放送されている「歌う！セールスマン」に出演中。

最新曲は、命を慈しむことがテーマの「ナユタの花」。

体験プログラム

●● お砂踏み(お遍路に行けない方にもご利益を)／数珠作り(一緒に片手念珠を作りましょう)

日 時 10月30日(金)
場 所 1階 エントランス
時 間 1回目 12:00～13:00
2回目 愛媛大会終了後～17:30



日 時 10月31日(土)
場 所 1階 エントランス
時 間 1回目 9:00～9:45
2回目 愛媛大会終了後～15:00



●● 腰塚勝也師仏画展(お坊さんが画いた仏さま)

日 時 10月30日(金)
場 所 2階 第3会議室
時 間 12:00～17:30



日 時 10月31日(土)
場 所 2階 第3会議室
時 間 9:00～15:00

●● 坐禅(禅僧と一緒に坐ってみませんか)

日 時 10月30日(金)
場 所 3階 第6会議室
時 間 愛媛大会終了後～17:30

日 時 10月31日(土)
場 所 3階 第6会議室
時 間 12:00～15:00
1回目／12:30～
2回目／13:30～



企業・団体ブース

企業名・団体名	出 展 内 容
公益財団法人 全日本仏教会	頒布品販売
曹洞宗 宗務庁	曹洞宗宗務庁出版物の販売
大和証券 株式会社	相続関連の資料配布・相談など
株式会社 金剛組	宮大工の仕事のPR他
有限会社 東洋美商	各宗派に合った十三佛の掛軸を用意し、本山や菩提寺からの揮毫を得て、各家に相応しい特別な掛軸の作成。
丸太屋佛具店	仏具
株式会社 スペースマーケット	寺社イベントサービス
株式会社 岩佐佛喜堂	お香
日鐵住金建材 株式会社	ジオラマ模型・パネル・映像(PC)ディスプレイなど
株式会社 東海大阪レンタル	防災関係商品
株式会社 サンマルシェ	柑橘と柑橘加工品
愛媛県観光物産協会	県物産品
腰塚勝也師(遍照院)	仏画集・クリアファイル・絵葉書



巡礼とは

四国の地において巡礼というと、まず四国八十八ヶ所霊場を想像なされると思います。古来より、生老病死の苦しみを抱えた人々が、お遍路さんとして各霊場を巡拝することで、自らの人生と向き合ってきたのです。しかしながら、巡礼はこれだけではありません。

日本は、八百万の神の国として、仏教が伝来する前からさまざまな信仰の形をとってきたからです。海外にも、異なる宗教や文化にもとづいて、さまざまな巡礼の形がございます。

聖地巡礼(キリスト教やイスラーム教など)

キリスト教の「イェルサレム巡礼」や「サンティアゴ巡礼」、イスラーム教の「メッカ巡礼」のように、一つの聖地を訪れて帰ってくる往復型の巡礼。



霊場巡礼(西国三十三ヶ所、四国八十八ヶ所など)

西国観音霊場のように、同じ神仏を祀る寺院を巡るものと、四国遍路のように、弘法大師ご修行の寺院などを巡拝することに加えて、遍路を歩くことで大師のご修行そのものを追体験しながら大師と同化していくという、回遊型の巡礼。

修行と布教をしながら日本を巡ったお坊さん

空海上人(弘法大師)

四国遍路の総合プロデューサー。弘法大師が杖をつくると泉が湧き出たといわれるように、全国には千件以上の「弘法水」がある。

空也上人

「南無阿弥陀仏」と唱えながら各地を巡り、お寺を建立するだけでなく、社会事業として道路や橋なども造った。

一遍上人

日本中を巡ろうと思い立ち、「南無阿弥陀仏」のお札を配ったり、民衆といっしょに「踊り念仏」をしながら、全国を遊行した。

木喰上人

特定のお寺や宗派にとどまることなく、全国を旅した「遊行僧」。各地を訪れては、一木造の仏像を刻んで奉納した。



空海上人

空也上人



木喰上人自刻像



一遍上人

日本の仏教においても、たくさんの僧侶が仏の道を求め、その教えを人々に伝えながら、巡礼の旅に出ました。その形に地域や宗派の違いはありますが、各地に残る祖師方の伝説は、人々の心を動かし、人々はこれに習おうと、同じ道を辿ってきたのです。

「おわしますがごとく」という言葉があります。仏さまが「あたかも、そこにいらっしゃるかのよう」に、手を合わせることによって、われわれは「大いなるもの」に抱かれていると感ずることができるとのこと。文化によって信仰の形が異なるように、巡礼の道も人それぞれです。人は、心を動かされるものに向って歩を進めます。人は、そこに「きっと、何かしらいいことがあるのでは」と信じて、祈るのです。その祈りが、人々の心を浄らかにしていく、まさにこれが「浄心の道」への入口となるに違いありません。

日本文化の聖地を巡る(巡礼)

いまでは日常語となっていますが、もともとは仏教用語であった言葉が日本にもたくさんあります。「出世」や「挨拶」もそうです。これらは本来の仏教的な意味が薄れてしまった言葉であり、また「巡礼」という言葉も、近年では、信仰というより、限られた文化の中の聖地を巡る旅という意味で使われることも多くなりました。

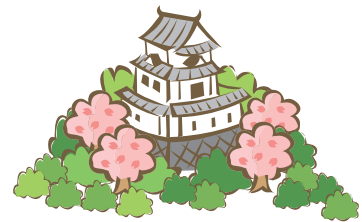
パワースポット(巡礼)

特殊な力をもった場所とされ、そこを訪れることによって自然界の気を自分の中にとり入れて、心が癒やされたり、力が湧いてきたりするとされている場所です。愛媛県では石鎚山、石鎚神社、道後温泉(玉の石)、大山祇神社、伊豫豆比古命神社、滑川溪谷、滑床溪谷、福地蔵の湧き水、新宮神社、一宮神社、和霊神社、鳴滝神社、観岩などが有名です。



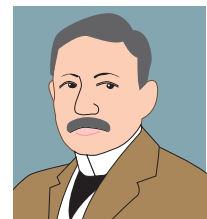
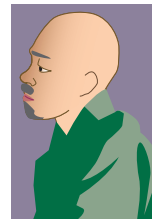
史跡(巡礼)

文化財や歴史上の人物などに所縁のある史跡を巡る旅です。近年は、「歴女」を中心に広がりを見せました。愛媛県には、松山城、宇和島城、今治城などがあり、村上水軍の能島、秋山兄弟ゆかりの地、または萬翠荘なども有名です。



文学(巡礼)

愛媛県では夏目漱石や正岡子規など多くの文豪を輩出してきました。その遺跡を巡り、先人への思いを巡らすことで、創作活動への転換を図るために、愛媛を訪れる文人も多いです。坂の上の雲ミュージアム、愚陀仏庵、松山市立子規記念博物館、伊丹十三記念館、一草庵(種田山頭火)、庚申庵(栗田樗堂)などが有名です。



メディア(巡礼)

映画、ドラマ、アニメ、漫画などで使われた場所を聖地と称して、多くのファンが訪れるようになりました。アニメの舞台になった道後温泉、ドラマの舞台になった久万中学校、梅津寺駅、恋人岬などが有名です。



サイクリング

これは、巡礼とはいえないかもしれませんが、愛媛県ではサイクリングが盛んで、自転車で海を渡る「しまなみ海道」は、もはや、サイクリストにとっては「聖地」とされ、海外の方からも愛されています。



聖地を巡るということは、非日常的な場所を訪れることであって、その空間に自らをおくことにより、人は何かしら感動を得るのだと思います。近年のサブカルチャーブームにのって、「巡礼」という言葉は非宗教的な分野にまで広がりを見せています。これらのブームの根底にあるものも、人々が巡礼に心を動かされてきた信仰心に近いものがあると考えられます。そこには、現代の人々が非日常の空間の中で、自身と向き合うために、その人生を見つめ直す場所を求めて止まない、切なる願いがあるのではないのでしょうか? 「きっと何かしらいいことがあるのでは」と。これらの願いも、巡り巡って、いつの日か「信仰の力」となって、もしかしたら仏の道を照らしてくれるのかもしれません。

10月30日(金)

◆ ひめぎんホール(サブホール) 開会式

- 開会の辞〈大会事務局長／愛媛県仏教会事務局長〉怒和 智幸
本日は、お揃いで、ようこそご来場でございます。
只今から、第43回全日本仏教徒会議愛媛大会を開催いたします。



- 洒水加持〈大会総裁／全日本仏教会会長〉加藤 精一 猊下



洒水加持の様子

- 法要

「三帰依文」一同唱和(経頭：愛媛大会事務局長 怒和 智幸)

じんしん う かた いまずで う
人身受け難し、今已に受く。
ぶつぽう き かた いまずで き
仏法聞き難し、今已に聞く。
このみ こんじょう お ど
身今生に於いて度せずんば、
さらにい ずれの しょう おいてか このみ ど
身に度せん。
だいしゅう もろとも しん さんぼう き え たてまつ
大衆 諸共に、至心に三宝に帰依し奉るべし。

みづか ほとけ き え たてまつ
自ら仏に帰依し奉る。
まさにねが しくば しょう
願わくば衆生とともに、
だいどう たいげ む じょう い おこ
大道を体解して無上意を撥さん。
みづか ほう き え たてまつ
自ら法に帰依し奉る。
まさにねが しくば しょう
願わくば衆生とともに、
ふか きょうぞう い ち え うみ こと
深く経蔵に入りて智慧海の如くならん。
みづか そう き え たてまつ
自ら僧に帰依し奉る。
まさにねが しくば しょう
願わくば衆生とともに、
だいしゅう とうり いっさい む げ
大衆を統理して一切無碍ならん。



- 「般若心経」一同唱和(太鼓：真言宗豊山派青年会)



●大会挨拶〈全日本仏教会理事長〉齋藤 明聖

第43回全日本仏教徒会議愛媛大会は、全日本仏教会と愛媛県仏教会と共同で開催するもので、愛媛県仏教会の長年の願いが結実したものであり、関係各位にお慶び申し上げますとともに、ご尽力に敬意と感謝を申し上げます。

今大会は「浄心の道－巡礼－」がテーマとなっています。現代は、人、物、金が世界を飛び回るグローバル社会です。企業は、厳しい競争にさらされ、人を物扱いしなければ採算がとれません。効率を優先し、人間を役に立つものと役に立たないものに分断していきます。まさに、命の感覚、一人一人のかけがえのなさを喪失せしめる状況であると言えます。今大会は、全日本仏教会・加藤精一会長による基調講演を始めとして、大変充実したものとなっています。本日までご参集のみなさまとともに、二日間に亘って、巡礼の心をたずねることを通して、今日の課題について考えて参りたいと存じます。



●大会挨拶〈大会会長／愛媛県仏教会会長〉福村 俊弘

第43回全日本仏教徒会議愛媛大会の開催にあたり、ご挨拶申し上げます。今大会のテーマは「浄心の道－巡礼－」です。

四国は八十八ヶ所霊場巡りで有名ですが、人は、なにを求めて巡り、そして祈るのでしょうか。現代は、命が疎かにされる事件や事故が毎日のように起こり、また、世界各地で紛争、テロや拉致なども絶えることはなく、大きな不安と怒りで心が重くなります。だからこそ、いま、このかけがえのない命の尊さを知り、正しく生きる道を求めることが大切なのです。とくに今年は、戦後70年という大きな節目に当たります。人間として最も愚かで恐ろしい戦争を、再び起こしてはならないのです。いつまでも世界が平和で、安心して暮らせる社会を目指しましょう。この愛媛大会が、みなさまの心の道標となることを願ってやみません。この大会へご協賛くださいました諸大徳ならびに各企業のみなさま、また、大会の運営にご協力くださった関係者のみなさまに、多大なるご理解とご協力を賜りましたことを、衷心より感謝申し上げます。



●祝辞〈愛媛県副知事〉上甲 俊史

本日、第43回全日本仏教徒会議愛媛大会がこのように盛大に開催されますことをお慶び申し上げますとともに、全国各地からお越しのみなさまを心から歓迎いたします。みなさま方におかれましては、仏教文化の振興はもとより、地域の伝統文化の継承、世界平和の推進にご尽力を賜っており、厚く御礼申し上げます。四国と言えば、空海上人の足跡を辿る「お遍路」が、開創1200年を迎えました。その長い歴史の中で、沿線住民のみなさまが、歩き遍路の方々に道を教えたり、お茶を差し出したりするなど、おもてなしの精神が根付いて参りました。こうした精神に則り、本県では「えひめお接待の心観光振興条例」を制定し、県民を初め、観光事業者や経済団体との連携のもと、観光客に対するきめ細かな心配りなど、お接待の心で観光振興に取り組むことにより、活力ある地域づくりに努めています。また、2年後に迫った愛媛国体の開催に向けても、来県されるみなさまを笑顔でお迎えできるように準備を進めているところです。そして、四国遍路の世界遺産登録を目指し、四国各県や関係市町村、霊場会、経済団体、大学機関などで組織する協議会を立ち上げ、受け入れ体制の整備やお接待の文化の継承と普及啓発を推進しながら、平成28年度中の国内の世界遺産暫定一覧表入りを目指し、四県一丸となって四国遍路の魅力発信に努め、四国全体の持続的な観光振興や地域活性化につなげて参りたいと考えていますので、みなさまにおかれましては、さらなるお



力添えを賜りたいと存じます。寺院は、古くから地域の中核とも言える存在であり、身近な憩いの場、コミュニティ形成の場として広く住民の方々に親しまれてきました。今後とも多くの方々にとって心の支えとなつてくださるとともに、地域や人々がつながり合うための中心的な役割を担ってくださいますよう、ご期待申し上げます。公益財団法人全日本仏教会ならびに愛媛県仏教会の益々のご発展と、ご出席のみなさまのご健勝とご多幸を祈念申し上げます。本日は、誠におめでとうございます。

◆ 基調講演 加藤 精一 猥下

ご紹介にありましたように、祖父が愛媛県松前町徳丸の出身ですので、ここ愛媛を第二の故郷のように感じて、今日お集まりのみなさまのことを拝見していると、とても他人とは思えません。

弘法大師が最初に書いたのは、24歳のときの『三教指帰』^{さんこうしきき}です。これは、必ず仏教の教えを身につけて国家へ恩返しをするという、言わば出家の宣言書でもあります。仏を目指して旅をしながら、儒教、道教、仏教の3つの教えを比較するという物語になっています。弘法大師は、儒教、道教、仏教の教えを比較して「これらはそれぞれに素晴らしい教えであるが、儒教と道教のよい教えは、ともに大乘仏教のなかに含まれているから、仏教を重視する」という、中国の学者もできなかった結論を、出家する前にすでに出しています。



弘法大師が最後に書いたのは、57歳のときの『秘蔵宝鑰』^{ひぞうほうやく}です。これは、『十住心論』^{じゅうじゅうしんろん}をわかりやすく著したものとされていて、弘法大師の最大の偉業は、この十住心思想を形成したことです。じつは、『三教指帰』と『秘蔵宝鑰』は、結論に至る点など、内容がよく似ているところがあります。弘法大師は、「小乗仏教の教えも、大乘仏教の教えも、真言密教のなかに含まれている」と結論づけています。このように、弘法大師は、世界で初めて、比較思想体系を確立したのです。

キリスト教やイスラム教では神話をたてますが、神を崇める教えは、異なる宗教と喧嘩になります。仏教は、お釈迦さまの智慧のおかげで、神話をもとにした教えを信じなくてもよい宗教です。仏とは、高い人格をもつ人間であって、神ではありません。仏教は、この世は神によって創られたという立場をとりません。また、反対に、この世は神ではなく物質によって構成されているという唯物論の立場もとりません。中道です。この世は、因と縁によってできていると考えます。第三の立場をとった仏教は、神話も否定しませんし、唯物論者も敵とは考えません。これは、お釈迦さまの叡智によってもたらされた偉大なる教えであって、これこそが、世界の紛争を解決する鍵になると考えます。

愛媛大会のテーマは「巡礼」です。弘法大師の比較思想というのは、結論に至るまでのすべての段階を大切にしています。つまり、心の遍歴を大切にする、旅なのです。世界の宗教にも、巡礼があります。巡礼とは、人間がなにかを求めて歩いて行くことです。なにを求めているのか、世界中の宗教に共通していることが一つだけあって、どの宗教も「お灯明」を焚くのだそうです。光は、人間の心を照らしてくれるのです。聖地巡礼というのは、人間が光を求めて歩いて行くことなのだと思います。

仏教では、人生は苦であると説きます。自分の力では思うようにならない精神的な苦しみのことです。この生老病死にどう対処するのか、これが仏教です。人間は、自ら望んで生まれてきたわけではないが、そう望んだ両親に感謝しなければなりません。だれでも老いていきます。なりたくて病気になるわけではありません。人間の死亡率は100パーセントです。ですから、どう死ぬかということを考えるよりも、どう生きるかを考えた方がいいのです。わがままに生きた人は、わがままに死んでいきます。律儀に生きた人は、律儀な死に方をします。われわれの人生は思うようにならないけれども、なんとかして光明を見つけていこうというわけです。

人生も巡礼なのです。ですから、みなさんも、毎日お遍路をするような気持ちで人生を歩んでください。ただ、そのときに頼る神さまや仏さまは、なるべく副作用のない宗教がいいと思います。私は、霊力なんか頼るということは、あまり好きじゃありません。宗教には、高い常識が必要です。弘法大師は、念力をもっていたのではありません。大変な努力家なのです。弘法大師は、嵯峨天皇が病気になるたびに、ご祈祷をしました。そして、その祈りをこめた神水をさし上げて、「薬を飲むときに使ってください」と言ったそうです。この水を飲めば病気が治るなどとは言っていないのです。弘法大師は、常識をわきまえた、嘘をつかない人なのです。偉いお坊さんは、高い常識をふまえていて、その上で祈るのです。ともに、光を求めていこうとしているのです。僧侶は、ただ悟りを求めて修行をするだけではなくて、苦悩して光を求めている人にそっと寄り添って、後ろから支えてあげられるような存在でなければなりません。仏さまが、人々の心の奥底にふれるような、そして、見えないところでそっと寄り添って勇気づけてくれる、これが本当の信仰なのです。たとえば、お遍路をしていると、知らず知らずのうちに弘法大師に救われていると実感できるということが、大切なのだと思います。

文化勲章を授賞された有名な哲学者、西田幾多郎先生は「わが心深き底あり悲しみも憂いもついに届かじと思う」という歌を残されています。心の奥底には感情の動きとは無縁の心の淵のようなものがあるという意味です。宗教は、その深いところに関係してくるから、気をつけなければなりません。みなさん、お腹が空いていると蕎麦屋の看板に目が向くように、「病気が治る」という広告を見るとそう信じてしまう人がいます。人間の心は弱いものです。その心に光を照らして、強くしてくれるのが宗教なのです。巡礼とは、光を求めて生きていくことです。人生も、巡礼です。みなさん、どうか、大きな光をもって、精神的にも元気で、よい人生を送ってください。

◆ 巡礼サミット

◆ パネリスト

四元奈生美
ホビノ・サンミゲル
吉川俊宏

◆ コーディネーター

寺内浩



・ 回遊型の巡礼と往復型の巡礼

【寺内浩】 巡礼には、2つのタイプがあります。基督教の「イェルサレム巡礼」や「サンティアゴ巡礼」、イスラーム教の「メッカ巡礼」のように、一つの聖地を訪れて帰ってくる往復型の巡礼。西国観音霊場のように、同じ神仏を祀る寺院を巡るものと、四国遍路のように、弘法大師ご修行の寺院などを巡拝することに加えて、遍路を歩くことで大師のご修行そのものを追体験しながら大師と同化していくという、回遊型の巡礼です。



・ サンティアゴ巡礼について

【ホビノ・サンミゲル】 基督教の巡礼とは、聖地（聖母マリアの出現した場所、殉教者の墓、聖人の墓、聖人が生活した場所）への旅です。サンティアゴ（聖ヤコブ）は、殉教したヤコブの遺骸を埋葬した聖地のことです。その道に決まった出発点はなく、フランスの道、スペインの道、ポルトガルの道など様々で、有名なフランスの道は1,600kmもの道のりです。巡礼しようとする人々の動機は、宗教（38%）、宗教と文化（54%）であり、信心、健康（心と体）、感謝、自己発見（心理を探し、悟りを得る）などです。

巡礼の目的は、ただ一つ、1200年に亘って人々が歩いてきたものを思い起こしながら、その神聖な空間を歩くことにあります。巡礼中は、決まった祈りはなく、服装も自由です。大聖堂では、巡礼者のためのミサが行なわれます。わたしはカトリックの司祭ですので、大聖堂でミサを行なったことがあります。5年前にサンティアゴの教会で日本人がミサに参加していたので、その機会をつかって「みなさん、一緒に福島へ祈りを捧げましょう」と提案し、日本語で特別な祈りを唱えました。そのとき、みんなで涙したことを覚えています。



・お遍路について

【吉川俊宏】 お遍路の道のりについて、現在は約1,400kmですが、当初は海沿いの僻地を歩きましたから、約1,600kmでした。今から1200年前に、東西同じくして始まった、二つの巡礼に共通点が多いことは、とても興味深いことです。



四国には、まだ仏教が伝わっていない時代から、^{へんび}辺鄙な土地、^{へじ}辺地といわれる道がありました。修験者が修行していたこの辺地が、仏道修行にも使われるようになり、弘法大師も若いころからご修行をなされました。大師が高野山へ入定なされた後は、その弟子や僧侶が大師を慕って、これらの修行の地を巡るようになり、やがて、お大師さまの道となっていったのです。当初は、僧侶や修験者だけの修行の道でしたが、南北朝時代から室町時代になると一般の人々も巡り始めるようになり、江戸時代になって「お遍路さん」として大衆化されていったと考えられます。こうして、穏やかな時代になるにつれて、その目的は修行だけではなく、乞食、つまり食べていけなくなった人、あるいは差別を受けた人、罪を犯した人も、人生の最期の地として四国を巡るようになり、四国の人々は、遍路するすべての人々を、温かくお接待し、もてなしたのです。

・歩き遍路を経験して

【寺内浩】 四元さんは、NHKの「街道てくてく旅」という番組で、歩き遍路を体験なされたそうですが、ここ四国を一周してみて、大自然と出会って、何か感じたことはありますか？

【四元奈生美】 全日本選手権でアキレス腱を痛めた直後だったので、1,400kmを歩ききることができるか不安でしたが、四国の山を歩いていると、土の下から力がわいて出てくるような、不思議な感覚がありました。そして、本当に治りましたから、大自然に囲まれた四国には、自然治癒力があるのだと思います。

【寺内浩】 八十八ヶ所を巡りながら、いろいろなことがあったと思いますが、驚いたことはありますか？

【四元奈生美】 険しい道のりに驚き、辛いこともたくさんありましたが、なによりも、四国の人の温かさに触れることができたことは、素晴らしい経験でした。

・お接待の文化について

【寺内浩】 四元さんも、各地で、さまざまな人々との出会いがあったと思いますが、その中で、心に残るお接待を受けたことはありますか？

【四元奈生美】 初めてお接待を受けたときは、正直、驚きました。お店の方に黒糖パンをいただいて「頑張って歩いてくるんだよ」と声をかけられました。代わりに納め札をお渡しするのですが、本当にいただいてよいものなのか戸惑いました。

こういうやりとりは、都会では経験できません。次第に、お接待をす



る人も、お接待を受ける人も、心のなかに善の気持ちがあるということに気づかされます。お接待の文化は、人の役に立ちたいと思う、そんな温かい気持ちを育んでいます。ですから、この四国のお接待の文化が、全国に広がっていったほしいと思います。

【寺内浩】 スペインにも巡礼している人をもてなす文化はあるのでしょうか？

【ホビノ・サンミゲル】 キリスト教では、人を助けることによって救いを得られるというイエスの言葉がありますから、隣人愛を大切にします。世界中からやってきた巡礼者同士が、たまに食事をともにしながら、とても仲良くしています。そして、共通の挨拶として「Buen camino（よい道を）」という声を互いにかけています。このように、巡礼者同士が交流を深めながら聖地へ到着することで、各地からの巡礼の道、宗教と文化の道が完成したのです。

【寺内浩】 なぜ、四国の人はお接待をするのでしょうか？

【吉川俊宏】 四国のお接待の基本は「お遍路さんはお大師さまである」ということです。お遍路さんにお接待をするということは、お大師さんにお接待をするということなのです。お接待をする側は、なにも見返りを求めています。ですから、お接待を受ける側は、ただ「ありがとう」と受けるだけでいいのです。「先ほどもいただきましたから」と断るのはよくありません。互いの喜びを分け合うことが大切です。また、遍路宿においては、病人が宿泊した場合には、治るまで追い出してはならないという当時の国の定めがあり、10日以上看病したら手当が出たという記録も残っています。

・信仰と体験

【寺内浩】 四元さんは、アスリートとして厳しい鍛錬をしてきたと思いますが、歩き遍路を続けるにつれて、不思議な感覚や、不思議な体験をなされたことがありますか？

【四元奈生美】 「街道てくてく旅」という番組の依頼を受けたとき、どのように取り組んでいくべきか、とても悩んでいたのですが、ふと、どこからか「思うままにやりなさい」という声が聞こえて、この旅で体験したことを素直に表現していこうと、吹っ切れたことを覚えています。そして、歩くことは、人間の根っこの力を呼び覚ます作用があるのではないかと思います。

【寺内浩】 信仰とは体験によるものだと思いますが、たとえば洗礼を受けた人は、巡礼により、神からの啓示のような体験を望んでいるのでしょうか？

【ホビノ・サンミゲル】 キリスト教の信仰とは、神からの特別な恵みとして与えられた真理を信仰することであり、信仰によってわれわれは救われると考えます。いま、なぜ歩いているのか、どうして生きているのかという真理を、神が啓示してくれています。われわれがこの啓示を受けるには、体験が必要なのです。巡礼は、真理を求めるための大切なプロセスです。

【寺内浩】 弘法大師は、四国の大自然の中で、なにを感じていたのでしょうか？

【吉川俊宏】 弘法大師が24歳のときに著した『三教指帰』に「阿国大滝嶽にあわのくにだりゅうがたきのぼりのぼ、土州室戸崎にどしゅうむろとぎこんねんこんねん。谷響をたにひびき惜おまず、明星来影みょうじょうらいこうす」とあるように、弘法大師は、この大自然に身をおくことによって、この体が大自然の一つ、大宇宙の一つと考えました。歩いてお遍路をすることによって、われわれは、即身成仏、つまり仏さまと同体であるということを体験できるのです。そして、いまをいかに生きるかということが大切であると気づかせてくれるのです。遍路行の基本は、ここに 있습니다。

・気づき

【寺内浩】 このように、弘法大師は厳しい修行を積み重ねながら、自らに向き合い、自己という存在を見つめてきたのだと思いますが、四元さんは、歩き遍路をするうちに、なにか心の変化に気づいたことはありますか？

【四元奈生美】 わたしは、自然とともに生きるということはどういうことだろうと考えながら歩いていました。あるとき、コスモスが風に揺られているのを見ていると、自分の髪も同じように揺れていることに

気づきました。そのときに、わたしは自然と同じように呼吸をしている、自然とともに生かされているということを、自ら実感することができました。

【寺内浩】 サンティアゴ巡礼を終えた人々には、どのような心のはたらきがおこるのでしょうか？

【ホビノ・サンミゲル】 これから新しい人生が待っているという喜びで、感動して泣く人もいます。西洋人は、心よりも、頭で考えると言われていますが、心の声を聞くことが大切であると思います。サンティアゴ巡礼は、心の道です。愛と希望の道です。心の声を聞くことで、力が生まれるのです。

【寺内浩】 お遍路を終えた人々には、どのような心のはたらきがおこるのでしょうか？

【吉川俊宏】 お遍路さんに出ようとする人の動機は、さまざまです。ところが、お遍路には、装束や参拝の仕方に、決まりがあります。みんなに合わせて、これらの作法を重ねていくうちに、たとえば、お経を読んでいると無心になるように、心が浄化されていきます。だんだんと、信心のような気持ちがわいてくるのです。不思議なことに、最後には「ありがたい」という気持ちに変わっていくのです。

・浄心の道

【寺内浩】 それでは最後に、吉川さん、お願いします。

【吉川俊宏】 巡礼が単なる観光と違うのは、心の変化があるということです。人の温かさを感じ、自然を感じ、無心になることによって、心が浄化されていくのです。ですから、四国八十八ヶ所を巡拝するときには、三つのことを心がけてほしいと思います。一つ目は、装束を整えることです。車で参拝する場合には、菅笠すげがさは邪魔になるかもしれませんが、完全な白装束とはいかなくとも、南無大師遍照金剛と書かれた白はく衣え（笄おいずる摺え）、同行二人と書かれた金剛杖こんこうづえ、念珠ねんじゆだけは持ってほしいです。白装束を身につけていると、道端にゴミを捨てたりするようなことはいたしません。それから、できれば写経をしてください。納経帳というのは、お経を納めることで、ご朱印をいただくためのものです。ご本尊さまの前で読経するのも納経ですが、時間をかけて写経したものを納めるのが本来の作法です。形を整えると、心がついてきます。二つ目は、たとえ参道だけでもいいですから、少しでも遍路の道を歩いてください。三つ目は、自利利他、つまり、自分の願いを叶えると同時に、他を思いやる気持ちを育んでください。これらのことを心がけながら、決まった作法を繰り返していくうちに、身も心も洗われて、浄心の心が生まれてくると思っています。

【寺内浩】 迷いをもって巡礼する人へ、励ましの言葉をお願いします。

【ホビノ・サンミゲル】 みなさんも、ぜひ歩いて巡礼してください。心がすごく元気になります。現代では、機械の力を借りながら頭で考えることが多くなっていますから、いろいろなことで悩み苦しんでいる人もいかもしれません。歩いて巡礼することによって、時間をかけて心に向き合うことができます。そうすれば、必ず、心が強くなります。そして、よかったらサンティアゴ巡礼にも来てください。

【寺内浩】 本日、ご来場のみなさまに、四元さんから、一言お願いします。

【四元奈生美】 四国八十八ヶ所のお遍路は、歩けば歩くほど、何かが必ず見つかる道だと思います。ですから、自らの足で歩きながら喜怒哀楽を感じ、他人から教わるのではなく、自ら考えながら答えを見つけしていく、人が生きるための哲学を探していく旅であると思います。また、四国のどこかでお目にかかることがありましたら、ぜひ声をかけてください。みなさんと会える日を楽しみにしています。

◆ 全日本仏教会代議員会議（併催） ひめぎんホール（第8会議室）

あわせて、加盟団体の代表者による全日本仏教会代議員会議が開催された。

● 交流懇親会開会の辞〈大会顧問／愛媛県仏教会顧問〉斎藤 友厳

この度、全日本仏教徒会議を愛媛で開催いたしましたところ、全国から、多くの仏教会の方々がご参加くださりまして、誠にありがとうございます。

全日本仏教会役員の方々のご指導を得ながら、愛媛県仏教会の会員各位が長い時間をかけて、立ち上げてまいりました。その間、当会にご賛同くださった方々におかれましても、深甚の敬意を表します。愛媛県仏教会としては、長年、この全日本仏教徒会議が愛媛で開催されることを願ってまいりましたが、これも偏に、愛媛県内の会員のみなさまのご協力の賜物であると思っております。これからも、ブツダの弟子として、仏教の宣揚と人々の幸せのために尽力していかねばならないと考えております。ここに、全日本仏教徒会議愛媛大会の交流懇親会を開催いたします。



● 挨拶〈大会副総裁／全日本仏教会副会長〉石田 智圓

律宗は、全日本仏教会のなかでも寺院数の少ない宗派でありますので、このような場で喜びの言葉を述べるができるのは、光栄の至りでございます。

子供のころ、ボーイスカウトで『仏のこども』という歌を覚えました。「われらは仏のこどもなり。うれしい時も、悲しい時も、み親の袖にすがりなん。われらは仏のこどもなり。幼い時も、老いたる時も、み親に変わらず仕えなん」という歌です。最後に、ベートーベンの第九の『喜びの歌』を歌って、喜びの言葉といたします。「祝えや喜びこよなき光、輝く御園に集える我ら、いましが力に結び合わされ、はらからの道を勇みて進む」。本日は、ありがとうございました。



● 乾杯

〈大会副実行委員長（総務部長）／愛媛県仏教会副会長〉岡田 敬学

本日は、ようこそお越しくございました。関東にも、関西にも、いい霊場があります。巡礼には、春には春の、秋には秋の魅力があるように、われわれもしっかりと大地を踏みしめて、人生の巡礼の道を歩んでまいりたいと思います。（乾杯）



● 交流懇親会閉会の辞

〈大会幹事（記録・広報部長）／愛媛県仏教会監事〉丹下 甫澄

本日は、各方面からお越しくござり、ありがとうございました。わたくしは、今から 30 年前にこの愛媛県仏教会のお世話をするようになりました。そのときから、「愛媛県仏教会の蓄財は、すべて、全日本仏教徒会議を愛媛で開催するときのためにある」と聞かされておりました。これまでの愛媛県仏教会の会員すべての深い思いがあって、やっと今日の日を迎えることができました。また、大会の準備をしていく上で、若い僧侶が育ってきたことを実感することができ、次の世代へバトンタッチができることを、とても嬉しく思っております。全日本仏教会ならびに愛媛県仏教会の関係各寺院、また、ご賛同くださった協賛企業とお手伝いくださったすべての方々に、深く御礼を申し上げます。



10月31日(土)

◆ ひめぎんホール（メインホール） ●座談会 天童荒太・白川密成・大下香奈

【大下】 天童さんは、文学の街、松山のご出身ですが、なにか影響を受けたことはございましたか？

【天童荒太】 もともと、小説ではなくて、映画をやりたかったのです。中学、高校のときには、奥道後の映画館や三番町2丁目にあった銀映など、いくつかの映画館がありましたので、年に200本は映画をみていました。ドラマが、どういう風にできあがるのかということが、たたき込まれていました。家は貧乏でしたが、環境に恵まれて、同じ映画を何度もみるような変わった子供でしたので、表現するということに対しての感覚が鍛えられたのだと思います。

【大下】『悼む人』とは、グッとくるようなことがテーマになっています。事故や事件で亡くなった方を悼むために、全国を旅して回っているという青年が主人公です。亡くなった現場を訪れては、死者を悼むという行為を繰り返して、全国を旅しています。ときには、白い目で見られたり、罵られたりしながらも、死と関わり合うという人間模様を描いている小説です。

この作品を書かれるきっかけとなったのは、何でしょうか？

【天童荒太】 9.11という酷いテロが起こり、大勢の人が亡くなりました。しかし、その人々を悼んだり、弔ったりするのではなく、それを怒りに変えて、さらに多くの人を殺していくという報復に、世界各国が賛同したということに、一個人としてやりきれなくなりました。そして、一個人だけに何もできないという辛さを抱えて生きていたと思います。そのとき、なにもできないかもしれないけれど、亡くなった人、一人一人を悼むという人間がいるとしたなら、人間を信じるということの、あるいは人間のもっている美質を見せてくれる存在になるのではないかと思います。あらゆる人を悼まなければ意味がありません。ニューヨークの白人の命は尊くて、カラーと言われる人の死は顧みられないという世界がいまもあります。死が平等でないということは、恐らく、生きていくことも平等ではないと思います。それでは、すべての人々を悼むということが可能なのか、そこで、わたしは、自ら、亡くなった人の現場を歩くということから始めました。そして、毎日、新聞を読んで、亡くなった人を、一日に必ずお一人は、悼むという行為を3年間続けることで、ようやく、この小説を書けるかな、というところにたどり着きました。こうして、一人一人をちゃんと悼んで歩いていると、もしかしたら過去に、ここでも人が亡くなったかもしれないと考えて、早く歩けなくなってしまうことに気づきました。これは、作品にも生かされています。

【白川】 この小説のなかで、主人公が亡くなった人を悼むときに、左膝をついて、右手を挙げて胸の前まで下ろし、左手を地面に近づけてから胸の前に上げて、右手の上に重ねるという、印象的な所作をするところが画かれています。天童さんも実際にそうして回られたのでしょうか？

【天童荒太】 巡っていると、悼んだという行為が欲しくなります。悼むには、その人を心のなかに入れていくという形が必要になると思います。人間は生まれてきた肉体と、誰かに愛されてきたという精神があって初めて、人間であると思います。ですから、片方の手で、誰かを思ったり思われたりしたという精神を集め、もう片方の手で、生きてきた人を地面から救い上げる、この二つを心におさめるという形になりました。

【大下】 亡くなった方を、心のなかに留めておくというのは、どういう意味があるのでしょうか？

【天童荒太】 人の幸せについて考えるときに、死を考えないようにすると、それを遠きにおいてしまいます。死を見失ってしまう可能性があります。死を、必然性のあるものとしておさめていくことが、地に足をつけて生きていくことであろうと考えました。これは、『永遠の仔』からのテーマなのですが、自己肯定感、生きていてもいいんだよ、人は誰かに愛されていると認められたいと思っているのだと思います。そして、覚えていてくれるということが大事なのだと思います。



【白川】 2000年前の仏典のなかに「死ぬということを認識した瞬間に、争いはなくなる」という言葉があります。そして、現代では、死というものが見えにくくなっていますが、この作品を書いて、死生観についての変化はありましたか？

【天童荒太】 現代は、消費することがよいとする、その反動が起こっていると思います。世の中に対して見返りを求め過ぎています。これが、人間関係にも影響して、恋人や子供にも「これだけのことをしてあげたのだから、返してよ」となり、関係を壊してしまいます。愛とは、本来は見返りを求めないものです。こうして、孤立化していくと、生きていることを確かめる術が無くなってしまいます。人が生きていくということは、誰かがそれを認めてくれるから、成立するのです。家族や友人が覚えてくれているということで、安心するのです。

【大下】 人は、生まれてから歩けるようになるまでは、親なしには生きられません。ところが、親から自立して生きていくようになると、それがあたりまえだと勘違いをします。もし、一つ一つの死に向き合うことができれば、「人生はあっという間に」などと考えてしまうことなく、ゆっくりと時間を生きられるかもしれませんね。

【白川】 お遍路には、お接待の文化があります。たとえば、なんちゃってお遍路さんのような方でも、この見返りを求めないお接待を受けた途端に、涙を流して感謝している姿を目にします。このような場面を子供のころから見てきて、人生や作品に影響を受けたことはありますか？

【天童荒太】 道後には、素泊まりの宿がたくさんありました。そこで、たくさんのお遍路さんを見てきましたが、それほど、意識はしていませんでした。『悼む人』を表現する上で、主人公が巡っていくわけですが、お遍路さんを見ていた記憶と繋がっていったように思います。彼にとっては、霊場巡りだったのだと思います。(いま、遍路宿をテーマにした小説を書いています)



【大下】 人の死を感じることは、生きていることに不安を感じて、苦しむのではないですか？

【天童荒太】 わたしは、生きるのが楽になりました。3年間、亡くなった場所を巡るわけですが、なかには子供さんもいます。すると、生きていることの偶然性を感じます。もしかしたら、シリアで爆弾に倒れているかもしれません。たまたま、愛媛に生まれ、人に恵まれて生きていることが奇跡なのですから、自分ができることは、丁寧に生きることだけです。残念ながら、人生は、いいことをしていたら、みんな幸せになるとは限りません。突然の災難に遭うこともあります。しかしながら、その日一日を丁寧に生きていれば、今日は丁寧に生きたというものは残ります。それでいいと思います。

【大下】 悼むということが、丁寧にその人のことを考えて覚えておくことであるように、巡礼も一つ一つ丁寧に巡っていくことですが、これは自分に返ってくるものがあるということなのですか？

【天童荒太】 巡礼というのは、祈りとはまた別のものであると考えます。祈りは、その場所で行う行為であるのに対して、巡礼とは、恐らく、巡り会おうとしているのではないのでしょうか。なぜ愛する人と死別しなければならないのか、なぜこんな生き方しかできないのか、生きている意味は何なのか、そこにじっとしては、このような疑問を解決できないから、何かに出会おうとして、人は巡るのだと思います。

【白川】 作品のなかで、登場人物が「それは愛ではなく、執着なのではないか」という問いかけを何度もしています。そして、最後には手放すという印象的なシーンがあります。この執着を手放すということについて、どのように感じていますか？

【天童荒太】 愛について考えるときに、見返りを求めるか求めないかという問題があります。消費することにおいて、損得の問題があります。お金もそうですが、時間の損失にはとくにピリピリしています。これは、自分への執着だと思っています。愛するものに執着することは、人間として普通の欲望ではありますが、本当に相手のことを思うときには、見返りを求めないはずです。そうしたときに、本当の花が咲くはずですが、その仕組みというのは、ときには、その人を手放すということも、見返りを求めない愛の形になるのではないのでしょうか。愛というものを、ものすごく大きくて抽象的なものと考えるのではなく、たとえば、その人

のために損をしてもいいと思えたら、それが人類愛だと考えています。

【白川】 仏教においても、「ちょっと損をしてでも、これ、あげるよ」ということを、丁寧に探し続けることが、教えの根本であったり、近いところであったりします。また、みなさんが、生かしやすい教えでもあると思います。つきつめていくと、ともに、同じ山を登っているように感じました。

【大下】 自分だけが損をすると、置き去りになってしまうのではないかと不安になるので、手放すということは難しいことだと思いますが、何かよい方法はありますか？

【天童荒太】 ときには、死者と対話するのがいいのではないのでしょうか。ただ祈るだけではなく、亡くなった人から見て自分はどうか、自分より悲しい思いをしている人の気持ちになって考えてみるのもいいでしょう。そうすると、自分を律することができると思います。律するというのは、厳しい表現に聞こえますが、さきほど、死者を思えば楽になると申したように、そんなにあくせくしなくても大丈夫だよというように、逆に豊かさを得られる、十分幸せだと思えるようになると思います。



【大下】 最近まで、携帯電話を持っていなかったのは、なにか理由があるのでしょうか？

【天童荒太】 必要なかったからです。だって、なかったじゃないですか。なくても幸せだったはずです。

【白川】 いま、若い人たちは、携帯電話を持つことで、常に監視されているような感覚に苦しんでいるのでしょうかね。

【大下】 たとえば、人は、自分で自分のことを苦しめるのだとしたら、そのように、一度、立ち止まって考えてみるということは、新たなものを発見できるきっかけになるのかもしれないですね。

【天童荒太】 では、子供のころの方が幸せだったかという、必ずしもそうとは言えないと思います。でも、かつては、目に見えないものが大切であるという感覚があったはず。これは、大切な感覚です。つまり、宗教や祈りのように、人間よりも尊い、物質よりも尊い何かがあるということのわきまえ、そのことが、人を、規範とか則^{のり}からハミ出させないものであったり、一つの肯定感、誰かが見てくれているという肯定感と、則を超えさせない力になっていたと思います。ところが、目に見えるものを優先してきたために、見られている、超えてはならない則のような、目に見えない縛りのようなものが失せてしまい、目に見えないものからいただく慈愛のようなものを、われわれは受けられなくなってしまっているのではないかと思います。だから、身近なもので、肯定感を求めるしかないのだらうと思います。

【白川】 どうして、目に見えないものの大切さを感じとることができにくくなっているのでしょうか？

【天童荒太】 現代は物質と消費の社会ですので、人は、広告に晒されることによって、どんどんカッコいいものを求めてしまいます。死とは、決してカッコいいものではないとを感じるが故に、どんどん遠ざけてしまうのだらうと思います。

【大下】 今日は、天童さんの優しい言葉を聞いているうちに、みなさまの心にも、何か少しずつ、もしかしたらと思うことが生まれているのではないかと思います。本日は、ありがとうございました。

◆ 天童荒太サイン会





片岡鶴太郎氏の活動の様子をまとめたVTRがスクリーンで流される。

片岡鶴太郎氏は、38歳で、今後の人生の方向に迷いを感じた。2月の朝、椿の花が凜と咲いているのを見て、自分との違いに愕然とし、これを表現したいと思ったのが、絵を描き始めたきっかけである。還暦を迎えて、違う人生が待っていると感じる。どんどん整理されていって、簡素でいたい。いらないものをそぎ落とすために、ヨーガと瞑想を行なっている。ヨーガや創作活動の様子が写し出される。

「流れのままに」の演題で講演が行なわれる。

ヨーガは5000年前に始まっている。ヨーガをやり始めた理由は、ブッダ、空海、ビートルズ、松下幸之助、スティーブ・ジョブズ、ヒクソン・グレイシーなど、尊敬する人の多くが瞑想を行っていたからである。ビートルズの「レット・イット・ビー」は、「あるがままに」という意味で、瞑想の歌である。瞑想は、ヨーガのなかの一つであり、ヨーガは、八つにわかれている。一つ目と二つ目は、非暴力を中心とする精神性。三つ目は、姿勢。四つ目は、呼吸。五つ目と六つ目は、精神集中のための精神性。七つ目が、瞑想。八つ目は、瞑想を終えた心の状態。瞑想をやるためには体幹を鍛える必要があり、そのためにヨーガの体操がある。本来は、美容のためではない。瞑想は、起きているときと、寝ているときの中間に、身を置く。目を閉じて、自らの深層心理、魂に、気を鎮めていくという作業である。平安時代に、日本に初めてヨーガを取り入れたのは、空海である。

(中略)

日本で、最初のCMタレント第1号は、歌舞伎役者の二代目市川團十郎である。まだ、テレビのない江戸時代に、その薬を飲むとスーッとして台詞回しがよくなるということで、歌舞伎の舞台上で、薬の宣伝をしたのが最初である。これが、有名な歌舞伎十八番「外郎売」である。最後に、片岡鶴太郎氏は「普通なら15分かかるところを、今日は頑張って5分で終えたら、いいお時間となります。おめでたい席でしかやりません。うまくできたら、お慰み^{なぐさ}でございます」と、披露なされた。



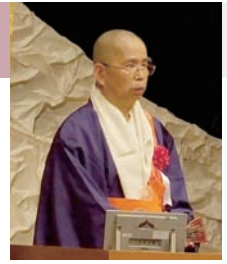
● 「御詠歌」 お遍路さん入場



◆ 記念式典（閉会式）

● 開式の辞〈大会幹事（財務部長）〉薄墨 賢祥

只今より、第43回全日本仏教徒会議愛媛大会の記念式典を開催いたします。



● 挨拶〈大会副総裁／全日本仏教会副会長〉常磐井 慈祥



二日間に亘り、第43回全日本仏教徒会議愛媛大会が、歴史と文化の香り高い、この松山の地で開催され、無事に円成できましたことを大変嬉しく思っております。世界的仏教学者である中村^{なかむら}元先生が亡くなられて、十七回忌を迎えます。中村先生は「あらゆる宗教のなかで、布教活動において武力を行使しなかった唯一の宗教は、仏教である」と、生涯をかけて力説なさっていました。そして、先生ご自身も、慈しみの心をもって、若い学生にも謙虚に接しておられました。仏教というのは、平和そのものであると考えます。われわれ仏教徒は、手と手を取り合って、世界の平和をリードしていく大きな使命を担っていることを、ここに再認識する必要があると、心から存じます。

● 大会挨拶 〈大会実行委員長／愛媛県仏教会副会長〉内藤 卓洲

本日は、ご参加くださり、ありがとうございます。平成25年6月に、全日本仏教徒会議愛媛大会の実行委員会を発足して以来、いろいろな紆余曲折もございましたが、このように盛大に、大会を開催できたことを、主催者一同、心より感謝申し上げます。また、今大会へご賛同くださいました、県内寺院、協賛企業のみなさま、大会運営にご協力くださいました寺院ならびにお手伝いのみなさまにおかれましても、重ねて御礼申し上げます。今大会は、各方面からの講演者により、「浄心の道－巡礼－」をテーマとして、さまざまなお話をさせていただきました。ご参加くださったみなさまの心に、今大会の「浄心の道」という言葉が残るのなら、これ以上の喜びはありません。また、実行委員の一人として、今大会の経験を、今後の活動に生かしながら、みほとけの道を精進してまいる所存でございますので、今後とも、愛媛県仏教会へのご協賛を賜りたいと存じます。



【司会】ここで、大会宣言の採択を行ないます。

● 大会宣言

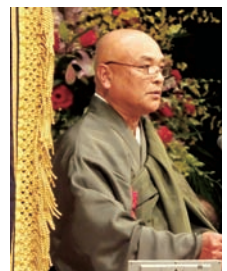
第43回全日本仏教徒会議愛媛大会は「浄心の道－巡礼－」をテーマに開催いたしました。

古来より、四国には、お遍路という世界に誇りうる巡礼の道があります。巡礼は、日本だけのものではありません。あらゆる宗教を超え、人類に共通する信仰の形として、さまざまな巡礼の道が存在します。

なぜ人々は憧れの聖地を巡るのか、今大会では、その心を解き明かしてまいりました。

情報化社会といわれる今、わたしたちはその恩恵をこうむる一方で、巨大な情報にのみ込まれ、まるで浮き草のように自分自身をも見失い、目まぐるしく過ぎゆく時間の中で、日々の大切さを忘れてしまいがちです。

今回の愛媛大会では、巡礼というテーマを通じて、信仰の大切さを共有いたしました。わたしたちは、みほとけの慈悲の心へと通じる「浄心の道」を日々の生活として、自らを見つめながら、一日一日を大切に歩んでいくことを誓い、大会宣言といたします。



平成27年10月31日
第43回全日本仏教徒会議愛媛大会
大会会長 福村俊弘

【司会】 仏教徒、みなのおいが、高らかに読み上げられました。会場、すべてのみなさまの拍手をもって、この宣言文を採択したいと存じます。ご賛同いただける方は、大きな拍手で、ご表明ください。

(一同の拍手により、大会宣言は採択なされる)

●大会旗の受け渡し

(大会事務局長／愛媛県仏教会事務局長・怒和智幸から、
公益財団法人全日本仏教会事務総長・倉澤豊明へ、返還される)



(公益財団法人全日本仏教会事務総長・倉澤豊明から、
福島県仏教会会長・石田宏寿へ、渡される)



●挨拶〈福島県仏教会会長〉石田 宏寿



この度の、第43回全日本仏教徒会議愛媛大会が、二日間に亘り、大きなテーマを掲げて、これを納められましたことに、感服いたしました。2年後、全日本仏教会は60周年を迎えます。また、東日本大震災の七回忌にあたり、阪神大震災の供養もあわせて、追悼供養を厳修したいと存じます。現在もまだ、被災された多くの方々が全国に避難をなさっています。これらの方々を、温かくお迎えくださり、引続きご支援くださっていることを、感謝申し上げます。そして、福島県もまた、復興の途中でございます。これまでのご支援に感謝申し上げますとともに、今後とも、変わらぬご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

●閉会の辞〈大会幹事(勧募委員長)〉石丸 光明

おかげをもちまして、二日間に亘る大会を終える運びとなりました。

人はなにを求め、道を巡るのか、大会では、浄らかな心、そして、心の道について議論がなされました。みなさまにとって、お互いに感謝できる出会いになりましたでしょうか。一日の感謝は一日の幸せ、一年の感謝は一年の幸せ、一生の感謝は一生の幸せと申します。幸せだから感謝するのではありません。感謝できるから幸せなのです。この大会で感じてくださったことを、日々の生活につなげてまいりましょう。ご参加のみなさま、ご来賓のみなさま、準備に携わったみなさま、すべてのみなさまに感謝を申し上げて、閉会の辞といたします。ありがとうございました。



● 編集後記 ●

第43回全日本仏教徒会議愛媛大会は、平成27年10月30日（金）、31日（土）の両日、松山市のひめぎんホールにおいて約3,000人をお迎えして、基調講演、巡礼サミット、記念講演、また、坐禅、お砂踏み、数珠作り、仏画展などが行なわれ、「浄心の道－巡礼－」というテーマについて、紐解いてまいりました。現代では時間の流れも速くなり、その変わりゆく時代のなかで、変わりゆくものと変わらないものについて知っていただきながら、巡礼について、理解していただくよう努めてまいりました。約1500年前に仏教が日本に入ってきて以来、その教えはわれわれ仏教徒の心の深いところに浸透して、日本文化とともに育まれてきました。たくさんの仏教語が日常の言葉として用いられ、なかには本来の意味が薄れ、別の意味に変わってしまったものもあります。たとえばこの巡礼という言葉も、宗教以外のいろいろな場面でも使われています。今大会では、巡礼をテーマとしていますが、その入り口はさまざまであり、はじめは信心をともしない形だけのものだとしても、繰り返していくうちに、やがて信心は生まれてくるものです。このような機会を通じて、一度足を止めて、ゆっくりと自分を見つめながら、変わることもない、見えないもの、大いなるものを感じていくことが大切です。自らの地位や名誉に執着し互いに内向きな批判を繰り返すのではなく、自己を盡くして他を生かしていく、われわれはお釈迦さまの弟子として、この教えを変わることなく説いていかなければなりません。これまで日本の仏教を育ててきた、多様で、柔軟で、寛容な日本の文化を誇りに、いまでも危機に瀕する、世界中のかけがえのない命を救っていけるよう、各仏教会が、各僧侶一人一人が、世界に向けてこの教えを発信していけることを願ってやみません。

当会の発足以来、全日本仏教会のご指導のもと、企画部、総務部、大会事務局と連携を図りながら、大会の運営に努めてまいりました。ここにご賛同くださった各企業、ご協力くださった各仏教会のみなさまに、心から感謝を申し上げます。

全日本仏教徒会議愛媛大会 実行委員会 記録・広報部

（この大会紀要は、全日本仏教会のホームページでもご覧になれます）

愛媛大会記念番組

～人は巡る、人は感じる～ 巡礼 心の旅

平成27年11月29日（日）14時30分～15時24分 放送局／あいテレビ

再放送 平成27年12月29日（火）15時55分～16時49分 放送局／あいテレビ



公益財団法人全日本仏教会
愛媛県仏教会





第43回全日本仏教徒会議愛媛大会

浄心の道 — 巡礼 —

発行日：2016年

発 行：愛媛県仏教会

編 集：公益財団法人全日本仏教会

全日本仏教徒会議愛媛大会 実行委員会

記録・広報部

制 作：株式会社イーエーシー